

せいじゆん

この本を手を取っていただいて、ありがとうございます。まず、自己紹介をさせていただきます。わたしは愛知県在住の49歳の主婦です。30代の頃、家族の体調不良がきっかけでリラクゼーションの仕事に携わるようになりました。その経験を活かし、自宅の一室でひっそりとサロンを営んでいます。

家族構成は、バツイチ同士の結婚で、夫の連れ子が1人います。その子は成人し独立したので、現在は夫と2人の生活を送っています。平凡な毎日ですが、そんな日常がわたしにとってかけがえのないものだと思いついたのは最近のことです。

以前はスピリチュアルに傾倒し、複数のスピリチュアル・サロンを利用していました。また、ヒーラー、チャネラー養成講座を受講するなど、スピリチュアルな道を探求していました。そして、本当のわたし、わたしらしさ、魂の使命や役割といった、永遠に答えのない問いかけをし続け、長い間自分探しの旅をさまよっていました。しかし、スピリチュアルの思想やスピリチュアル・サロンのビジネスのやり方を見ているうちに、少しずつ違和感を覚えるようになり、最終

的には完全にスピリチュアルに別れを告げました。不思議なことに、スピリチュアルを捨て去った今のほうが、精神的にずっと安定していて、日々の暮らしに充足感を得ています。

この本は、スピリチュアルが好きな方にはまったく関係のない内容です。他人を巻き込むことなく、個人的に楽しむことは自由です。また、それで幸せでしたら何よりです。そうではなく、スピリチュアルが好きだったけれど、そこに疑問を持ち始め、「もうやめたいけれど、不安や恐怖感でなかなか抜け出せない」という方に本書は向けられたものです。わたしは20代の頃から入れ込み、40代後半で足を洗いましたが、慣れ親しんだ世界から出ていくことはとても怖いことでした。それは、おそらくカルト宗教から脱会するときの心境と似ていて、世の中で1人きりになつてしまうような不安を感じました。わたしの個人的な体験ではありませんが、同じような状況の方に、「あなた1人ではない」という励ましになるかもしれないと考え、その経緯を書き残そうと思いました。

前半はわたしの生い立ちをたどり、スピリチュアルにのめり込んでいく過程を書いています。後半は、どこに疑問を持ったのかを項目別にし、調べたことやサロンで見聞きしたこと、そこから自分がどう思ったのかを書いています。決して派手な出来事ではありませんが、自分の中の小さ

な引っかけかりを一つひとつ丁寧にすくい上げ、その感覚を信頼することにより脱出することができました。

本章に入る前に、現在のわたしのスピリチュアルに対する立場を書かせていただきます。スピリチュアルの定義は人により異なることと、広範囲ということですが、わたしなりの解釈になります。まず霊性の部分ですが、神秘的なものや、現在の科学で証明できない未知の部分が多いため、常識を超えたものがあってもおかしくありません。また、神仏や大自然に対し、尊ぶ心も持っています。これらは、日本人の多くが有する意識ではないかと思えます。

わたしが疑問を持ち、捨てたものはそういった感受性ではなく、スピリチュアル特有の思考とスピリチュアルをビジネスにしている人々です。わたしの考えるスピリチュアル・ビジネスとは、商品が霊性を用いた目に見えないもの（チャネリングメッセージ、ヒーリング、リーディング、宇宙の法則などの情報を教える、なんらかのエネルギーを込めたグッズの販売など）であり、科学的、医学的に検証できないものを販売して利益を上げることだと捉えています。これらの商人により伝えられる高次元の存在や大天使、ガイドからのメッセージなどはまったく信じていません。また、安易に関わることは危険だと感じています。

もう一つお断りしておきたいことがあります。スピリチュアルに踏み込む理由は人の数だけありますが、わたしの場合は自分の甘さや弱さが原因の一つだったと思っています。でも、これはわたし個人に限ったことで、すべての人がそうだということではありませんので、あらかじめご了承ください。

過去のわたしにとってスピリチュアルの世界は、とても魅力的に見えていました。愛や光にあふれていて、真実、幸せ、成長がそこにあると思っていました。でも、そこにあったものは、矛盾と欺瞞とマインドコントロールでした。それらを感じ取りながらも振り切れないでいる方へ、自分自身の感覚を信じる勇気を持つ一助になれば幸いです。